

## 明治以来の悲願「鹿児島港の開港」

「鹿児島港を直接外国貿易ができる開港場にしてほしい」との運動が起こったのは明治32年8月。鹿児島商業会議所会頭の名で「鹿児島開港実現の建議書」を各大臣に送付したのが出発点です。鹿児島港の出入船舶数は明治中期に比べると4倍以上にも増加し、貿易物資の往来も急増して悲願達成への願望は一段と高まっていました。大正3年に入ると、第1次世界大戦が勃発。やがて大戦景気が訪れて貿易取引はさらに増加しました。

しかし、鹿児島港が開港場でないため、貿易物資はすべて長崎税関経由での取引が続ぎ、発送した商品の納期遅延が発生するなど、地元関係業者の不満は頂点に達しました。その後、大正6年9月、ようやく鹿児島開港の法案を帝国議会に提出するまで至り、同年7月に「鹿児島開港の件公布、即日施行せらる」との電報が県知事に届きました。ところが、国のうっかりミスで税関支署建設を含む検疫関係予算を計上していないことが判明。

国は、県・市との交渉でも「開港は次年度の予算を待つて実行」との方針を譲らなかつたことから、同月の市会

（市議会）は、「鹿児島税関支署の建築費2万5千円支払いの件」を満場一致で可決しました。税関支署は国の出先機関であり、本来は国費によって建設されるのが筋ですが、20年以上にわたって鹿児島港開港を念願し続けてきた鹿児島市当局や市議会議員等多くの関係者にとつては、開港実現が目前であつたことから、「鹿児島税関支署については県が県有地を寄付し、建物は鹿児島市が市費で建設する」ことで一件落着。こうして同年8月には正式に開港事務が開始されたのです。



大正10年当時の鹿児島市街地と港